

# 女城主「日女若」

ひめわか



日女若 Illustrated by Mori

坂本 精徳

## 新しい通勤経路

千葉ニュータウンに転居してすでに20数年以上になった。当時、将来発展する街であり、区画整理もきちんとできているし、子供を育てるのにいい環境ではないかと思案して柏から移ってきた。

しかし、働いている場所がそのまま柏なので、ずっとニュータウンから柏に通いつけている。飲み会などがあるときを除いて、普通は車での通勤であるが、経路としては、ニュータウンから十余〜平塚〜白井工業団地〜金山〜藤ヶ谷ゴルフレンジを過ぎて国道16号に右折し、柏に向かっていている。前後の車で同じ経路をとる車もあるの、ニュータウンから柏へ行くごく一般的なルートだと思う。長年通ってきたこの経路は、とくに朝方など柏の呼塚方面に近づくにつれて渋滞が厳しくなることが多い。そこでこの1、2年、朝だけでも迂回して行くようにした。平塚の集落から手賀沼カンナ街道に出て、今井、名内から手賀で柏印西線(県道282号)に入

り、さらに鷺野谷、岩井、箕輪、大井、戸張を経由して国道6号の北柏入口交差点に出る。渋滞があまりなく所要時間はコンスタントだが、距離は若干長くなり、ややマニアックなコースである。ただ気分転換にもなるし、ずっと手賀沼周辺を走行しているの、人気のある観光地とまではいかないが四季ごとに手賀沼周辺の自然に触れ合うという意味ではいいコースだと思っている。今井の桜もあるし、田植え、稲刈りも見れたりするし、秋になれば木々も色づく。カンナ街道のカナは、春先から晩秋までかなりの期間咲いている。派手な花だと思うが、路傍に地味に咲いている。

## 箕輪城主「日女若」

2017年のNHK大河ドラマは、「おんな城主直虎」で、戦国を生き抜いた女の激動の生涯を描いたものであった。歴史上他にも戦国期に女城主はいただろうが、手賀沼のこの通勤経路にも女城主がいた。箕輪城主「日女若」である。ただ、創作物語「伝奇日女若」の架空の女城主である。

「伝奇日女若」は大正時代の歴史家・文学者である笹川臨風が書いた伝奇物語である。時は戦国時代、舞台は南相馬手賀沼南岸の箕輪城である。日女若は箕輪城主に嫁いだが、夫が病死したため、若くして自ら城主になり、箕輪城周辺を納めていた人であるが、全くの創作ストーリーである。ただ箕輪城は実在しており、城跡は柏市箕輪の手賀沼病院のある場所にある。新しい通勤経路はその前を通

っているので、気になっていたが改めて取り上げてみることにした。

箕輪城跡は、舌状台地の突端にあり、当時は目前に手賀沼の水辺が広がっていたであろう。その手賀沼には現在立派なサイクリングロードがあり、そのかたわらに、この物語をあらすじらしきものが書かれた碑文が残されているので、まずその文章を紹介する。

### 伝奇「日女若（ひめわか）ものがたり」

市川新之丞は手賀沼の渡船に揺られていた。目的は主君千葉介の手紙を箕輪城に届ける事。しかし彼の心には別の想いがあつた。箕輪城の城主は日女若といい、知らぬ者のない美しい女武者で、戦場で一目見て以来、その美しさに心を奪われていたのだつた。千葉介と箕輪城の和平は成らず、千葉方の兵二千騎は、手賀沼の前に、白幡・発作の間に陣を張つた。

日女若夫人は長刀を水車の如くに奮戦したが、敵の大軍前にじりじりと押されていった。敵兵に囲まれ日女若の命運もはやこれまどと思われたその時、若武者の一団が千葉方に向かって突撃を開始。混乱した敵は大将を討たれ、総崩れとなって退却した。戦勝に沸く箕輪城のなかで、深手を負つた若武者（新之丞）は日女若に抱かれながら、息絶えたのである。

※「日女若ものがたり」は箕輪城を舞台に、美しい女城主日女若」が活躍する戦国ロマン小説です。

日女若の物語は、ずいぶん前になるが、沼南町（現柏市）の図書館で借りた南相馬郡物語（浜田穂積著）で読んでいた。当時相馬氏の歴史に興味あつて手にしたものであるが、「文学者の描いた手賀沼の作品」として載っていたものを読んだ。大正時代の作品で旧かなづかいで読みにくいため、現代新漢字、新かなづかいに復刻したものらしい。それでも私にとっては難しい漢字もあり、その場合はいつも読み飛ばし、なんとなく文脈で理解しようとしていた。大正時代に書かれた手賀沼周辺の戦国時代のまったくの創作物語であるが、ストーリーの構成も良く時代考証もしっかりしているのか素晴らしい内容になっている。行春の手賀沼の風景があり、ラブロマンがあり、戦闘シーンがあり、さらに舞台となっている地域のローカル性にも合っていることが面白いと思う理由になっている。

サイクリングロードの碑文は、この物語を要約したものだと思うが、うまく要約されていると思う。せつかつたので、箇条書きでいくつか補足しておく。

○日女若は、18歳のとき嫁いできたが、夫（箕輪右京進信茂）が若くして亡くなり（病死）、その後を継いだ若き美貌の未亡人であつた。（そのとき文明11年、西暦1479年、日女若23歳）

後を継いだ日女若夫人は、一千の兵士を自由自在に指揮して余裕があつたとある。そして、その側には、若く、美しく、賢い12人の女子衆がいた。それぞれ花若、雪若、清若など若の字をもらつていた。城の守備範囲は、長善寺（多分、戸張）、子の神（現我孫子

市役所近く)、高野山、布佐、竹袋までの記述があり、相当広範囲である。

○舟は専用の渡船ではなく、新之丞が乗せてもらったのは城用の船で、さらに藻探舟から人待ち舟(飾舟)に乗り移り、城の女子衆に飲み食いの接待をうけている。

○新之丞は日女若夫人と公式に面会した後、城内で日女若夫人と二人になる機会があり、そこで新之丞は「日女若夫人を見るのは今回が3度目で、主人千葉介からの艶書の使いを進んで請け、今回それを機に箕輪に帰参したいこと」を打ち明けた。しかし、日女若は、「主君千葉介殿の使命を果たさず、他家に留まるのはけしからぬ了簡だ」「返事を致すので、使命を果たして後、直に当城に参るがよい」といつて新之丞を返した。

○千葉方の兵二千騎とあるが、箕輪方は前述したように一千の兵士であり、戦力的には圧倒的に劣勢であった。

○千葉方は、白幡・浦部・亀成・和泉・発作に陣を張った。

○箕輪方の旗本は、日女若夫人に女武者12人とそれを護る勇士を従えて、迂回して今井、名内、平塚へ進み、延命寺まで至っている。

○若武者の一団というのは、敵勢より現れた武者一騎とつき従う十余人であり、市川新之丞の一団である。獅子奮迅、花々しく戦い、

この間に箕輪勢も立て直すことができた。このとき、女子衆の花若が唯一人旗本を離れ、千葉介を討ち取り、首級を持ち帰ったことで、勝敗が決した。

詳細は、実際の小説を読んでいただければと思う。フィクションとはいいながら、近くでこのようなロマン溢れる面白い物語があり、それに合戦があったというだけでわくわくする。長編小説ではないのでテレビドラマを2、3本見るくらいの時間で読めるはずである。

### 感想に替えて

この小説を読んだ感想に替えて、気になることを、2、3あげてみたい。千葉孝胤(のりたね)が太田道灌に手痛く敗れた境根原合戦が文明10年とあるので、この小説で千葉介と呼んでいるので千葉孝胤に該当しそうである。物語なのでどうでもよいことではあるが、その敗戦の後何年もたたないうちだが、艶書だけは書く余裕があったのだろう。その裏に支配地拡大の野心も見え隠れする。

箕輪城のある手賀沼の周辺は、古代から我孫子市域も含めて下総国相馬郡であり、相馬氏の拠点多くあったところである。明治になって南相馬郡になり、明治30年には東葛飾郡に編入された。この小説のなかに、城から流れてくる音曲の詩なかに「葛飾の、手賀の乙女ら、箕輪なる城の・・・」のくだりがあるが、どうしても

「葛飾」が気になってしまう。笹川臨風先生がこれを書かれた大正

時代は、すでに東葛飾になっていたが、少なくとも戦国時代のこの地は相馬郡であったはずである。詩の韻があわないとか、わかりやすく当時の地名に合わせたとか、なにか事情があったのかもしれない。

この小説で最大の疑問点は、いざ戦いとなったとき、日女若の旗本がなぜ平塚まで出陣していったのかということである。箕輪城は、舌状台地が手賀沼に突き出た形になっており、当時は三方が水辺だったと考えられるので、防御しやすく、戦力から考えても籠城戦でよかったように思う。相手方が守備範囲の近くまで迫ってきている状況で、その近くまで攻めにでていくようなものである。千葉方の陣地の配置もなぜか防御のための配置のようにも思える。しかし、これも物語を面白く展開させるための仕掛けであると思えば理解できる。それと、劣勢でありながら逆転勝利する展開は、桶狭間の戦いを想起させるが、そのようなストーリーにするためにも、これらの陣地設定は必要だったのかもしれない。ちなみに、日女若が陣取った延命寺も舌状台地上にあるが、敵味方の戦闘はこの台地上で行える。それにしても、野戦である程度の規模の合戦をするには、前述の境根原のように、大抵、原っぱが必要になると思うのであるが、当時近くには田んぼ、畑、里山、水辺の他にも、何かしら空き地みたいのはあったのであろう。

筆者は、この数年趣味で歌入りの曲を作って楽しんでいるが、曲のテーマを探すのに苦労している。それで歴史や地域に関わるテ

マで曲を作ったりしているが、この「日女若」についてもその準備を進めているので、完成のおりはぜひお聴きいただければと思う。

(2020年の春以降、ネット上で「日女若 kiyoi」で検索、kiyoはペンネーム)

最後に、手賀沼周辺を車で走行してとくに感じたことを一言申し上げたい。手賀沼周辺には景観が美しいと思うロケーションはいくつもあるのだが、立ち並ぶ電柱がその美しい景観を邪魔していることが大変残念である。電柱の地中化は昭和の終わりごろから叫ばれている国の重要課題のひとつであると思うが、コストなどの面で、地中化しているのはほんの一部である。日本は美しいなどといっているのは日本人として恥ずかしい。時間がかかるのは仕方がないが少しでも前に進めてもらいたいと思う。

(印西市小倉台在住)